

● 井上道義さん

いのうえ・みちよし 指揮者。愛称・ミッキー。1946年、東京生まれ。桐朋学園大卒。71年、グイド・カントレルリ指揮者コンクール優勝。国内外の楽団で活躍。現在、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者など。2016年東燃ゼネラル音楽賞・洋楽部門本賞を受賞。

一夜にして生まれ、死ぬ演奏

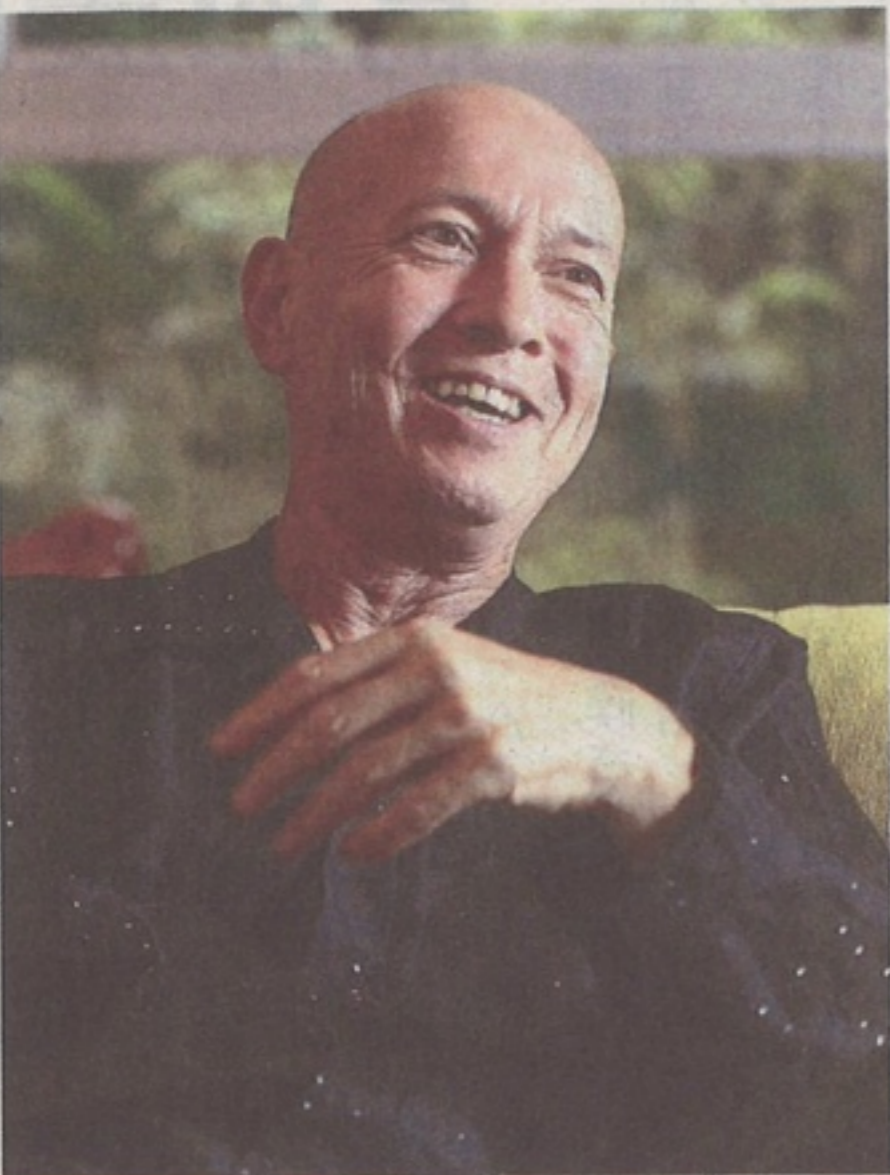
ジジイになるまで飽きない仕事をやりたい、と思って選んだのが指揮者なの。フラフラした性格だから。14歳の時、あらゆる職業をリストアップして消去法で決めた。ピアノの練習もフランス帰りの先生にピンピン鍛えられ、帰りのバスの中で泣いた。その頃、小沢征爾さんが、仏プザンソン国際指揮者コンクールで1位になった。彼の師の斎藤秀雄に習えば、日本人でも指揮者になれるのかと考え、桐朋学園に入って教わった。

大卒後、東京都交響楽団の副指揮者になったけど、ものすごく生意気だね。なかなか定期演奏会を指揮させてくれないから、怒って国際コンクールに出場したところ優勝し、テングになった。欧州に住んで仕事始めたけど、自分の未熟さは百も承知。講習会で才能を認めてくれたチェリビダツケの薫陶を受けた。欧米の知識人が禅に興味を示していた時期で、先生も普段は僕をアリのように扱う一方、ちやほよもした。しかしある時、先生が指揮した同じ会場で数日後に演奏会を指揮できる好機を得て、報告に行った。「何も出来ないくせに早い。破門だ」と。偉い先生像が一気に地に落ちた気がした。

振り返ると、恩師たちからは踏み付けられる言葉ももらい、僕のエネルギーになった。僕もけんかをふっかけられた方が好きです。それでも、ベームやマーラーの交響曲の録音に参加できたジュリーニ、様々な人や仕事を紹介してくれたアバドらとの出会いは貴重な体験だ。

僕の演奏への評価は、マーラーやショスタコービッチ作品を挙げる人が多い。でも愛着ある世界は、モーツァルト。聴衆とのギャップです。ずっとハイドン、モーツァルトをきちんと振れる指揮者になりたいとやってきた。楽譜から様々なことが伝わってきて、発見が多く味わい深い。20代でザルツブルク・モーツァルトテウム管弦楽団と初録音した際、「下手なオケだな」と思ったけど、音楽を自分の言葉で演奏していた。僕には自分というものがなく、自信を持ってない時期もあった。一夜にして生まれ、一夜にして死ぬような演奏がやりたい。非常に儂い(はげ)が、その場で正しいと感じられる音楽をね。

2014年4月、咽喉がんになった時、もうおしまいかと思った。抗がん剤治療などはつらく、水が辛く感じて喉が痛くて飲めない。部屋に入る空気の臭いも耐えられない。せきで眠れず、気が狂いそうだった。音楽は、苦しい時に役に立たなかった。もちろん、約半年後に復帰し、終演後は時々、「この曲をもつ一度やることはないかもな」という感慨が襲いますけどね。



撮影・高橋美帆

小沢さんとも言い合いしたし、僕がいつも偉い人に生意気な態度でしか接することが出来ないのは、尊敬できなかった父親との関係から。懐にナイフを持ったような付き合い方しかできない。それに僕は幼い頃から、周囲の日本人と異なる考え方をすることに、違和感を持ち続けてきた。

それが突然、父親が死んだ40歳の時、母親から実の父親が「ガーディナーさん」というアメリカ人であると出生の秘密を告げられた。なぜもっと早く教えなかったのか、若い頃ならちゃんと悩めたのに。年取って「あの時にあったのは……」と合点がいっても、人間関係で取り返しのつかないことばかり。母親に文句を言っても「え、そんなことなんで問題なの」と言われ続けたんですけどね。

最近、作曲を始めたの。育ての父親へのオマージュのオペラを書いているんです。まだ半分でやりかけだから、書き終えて死ななきゃいけないと思っています。

聞き手・岩城扱

鋭い眼光と舌鋒変わらず

「鬼才」「異端児」と言われ、歯に衣着せぬ発言と斬新な発想が魅力のマエストロ。ただ音楽

性は正統で「僕が一番まともな演奏」と自負する。大阪のオーケストラの数についても「多すぎる」が持論。「ドーンと突き抜けた優れたオケが必要で、ド

ングリの背比べでは客は入らない」。指揮台で跳んだりねたり出来なくなると体力の低下を嘆きながらも、鋭い眼光と舌鋒は変わらない。